# 米倉二郎先生と歴史地理学会

高　重　　進

米倉二郎先生
（米倉亜州夫氏提供）

米倉二郎先生が歴史地理学会会長に推されたのは昭和51年４月29日の日本女子大学で開催された第19回大会の総会に於てであり，任期は51・52年度で，再任の中田榮一常任委員長とのコンビであった。当時米倉先生は既に昭和27年３月以来の広島大学文学部地理学教室教授を昭和48年定年退官され，引続いて広島修道大学商学部教授に迎えられていた。先生は御自身が私費で渡印され切開かれたインド研究の第７次調査のしめくくりと，新しく修道大学で開拓されようとしていた比島の打合わせ（昭和50年11月21日～12月15日）の整理と対応に追われると共に，御郷里の佐賀県上峰村史，広島県史の編纂，その他自然保護や都市などいくつかの調査をかかえて東奔西走の毎日であったが，比島準備もあって上京の機会は多く，５月１日の常任委員会，７月10日・11日の静岡大会など学会活動もその間をぬってされていたようであった。ただ，この年度は学会が多く，特に I.G.U モスコー大会があり，先生は７月28～８月５日の大会にシベリア経由で出席されたためにかなり体力を消耗されたようである。その上比島調査の準備や上述の調査のほか都市学会関係の大会開催もあってついに12月７日発病し，胆石の切開手術のために３月25日まで広島大学附属病院に入院されることになるのである。歴史地理学会の次年度開催場所はすでに９月の段階で石田寛教授に広島大学文学部をお願いし了解の上それぞれ準備がなされたようである。この昭和52年度大会は第20回に当り４月30日～５月２日に20周年記念講演として会長講演「歴史地理学の伝統と課題」が菊地利夫教授の「歴史地理学における最近の動向」と共に行われ，前年度の共通課題：都市の歴史地理17本に対して村落の歴史地理の15本の他，自由論題８本も発表されて都市と村落に加えられ盛会であった。

私は昭和30年10月から助手の職をけがしていた広島大学文学部地理学教室から昭和41年４月に岡山大学に転じ，当時51年９月までの１年間 U.K. のベルファーストに在外研究員として出張していたこともあって，執筆の任ではないが，米倉先生からは特に歴史地理学を御指導いただいた御縁で，まつわることのいくつかを以下に述べさせていただくことでお許しを願うことにしたい。

先生はライフスタイルに於ても，学問の道に於ても，来し方をたえずふり返り，行く末を見定めて進まれるゆき方をされた。行く末を見定めるために，来し方＝歴史をまず見る方法をとられた。山口高等商業学校（現山口大学経済学部）教授時代，戦況が苛烈となって南方派遣軍総司令部の調査班が設けられ従軍を要請された時，それまでになされた「東亜の集落の歴史地理学的研究」を京都帝大人文科学研究所へ提出され，南方へ祖国を後にされたが，それが戦後昭和35年『東亜の集落』として公刊されたことは周知のところである。地理学者としての生涯を振返った，郷里佐賀市で平成９年５月17～19日歴史地理学会40周年記念での特別発表「佐賀平野の歴史地理」が副題のように故郷と私の地理学のラ

イフスタイルであるとすれば，同じく20周年記念で会長として講演された「歴史地理学の伝統と課題」は歴史地理の来し方，行く末を吐露したといえよう。歴史地理学以外の先生の都市地理学，地域開発，中国・インド・フィリピンなど数多い研究での御活躍を考える時，共にゆかりの本会紀要と機関誌歴史地理学に収録されたことは意義深いことと云わねばならない。

40周年記念の佐賀大学で開催された大会では地理学者として歩んで来られた来し方を「私の地理学は佐賀県からはじまった」と総括し，第１作の「筑後川下流平野の開発」が恩師小川琢治先生のアドバイスで，当初考えていた沖縄を改め卒業論文にしたことと共に，直接論文はあげなかったが，第二次大戦後の実証的歴史地理学の原点ともなった「農村計画としての条里制」の発想の原点が，卒業後同郷佐賀久留米出身の農学部農村工学教室の古賀正己教授のもとで１年間嘱託として自由に研究させてもらったことによることを語られている。発想した者の独創性はすべて人に認められるとは限らない。この論文の「大字十里」で提起された考えが今様で云う「佐賀発」であったために，これまで多くの条里制研究者との間で，「十里」に象徴される原理を認めるかどうかをめぐって論争がなされてきた。いわば条里制研究者のそれぞれ発想の原点が異なっているからである。佐賀県の条里では，いわゆる36か坪の条里の里が，「吉野ヵ里」遺跡に見られるように１つの単位をなし，明治の町村制施行に伴って「ヵ里」が取除かれ，固有名詞部分のみで呼称されるようになった。これに対して，近畿及び周辺の多くの条里制施行の地域では，36か坪単位が裁断された近世村，現在の大字の境界が見られる。研究者の間では「十里」は例外ではないかという考えも出てきたが，先生はその原理のイメージを佐賀県に求め，その上で第３論文の30戸１里制論を原点として示されたのではなかったか。その意味でこの40周年記念の特別発表は最後の弁明になったように思われる。

先生のものされたものは簡潔・明快で説得力があった。私はそれは佐賀高等学校が理科であることにあるか，或は200字詰原稿用紙を愛用されることにあると思っていた。その１つが比較にあることを知ったのは後のことである。戦後いち早く刊行された『聚落の歴史地理』（帝国書院，1949）にエッセンスが収録されている「京・平泉・鎌倉―その都市地理学的比較研究」（立命館文学３の５，昭和11年）は都市の理想型・源流とその伝播を追究する研究の過程でとられた初期の典型の１つとすることができよう。大著『東亜の集落』（古今書院，昭和35年）もサブタイトルが「日本および中国の集落の歴史地理学的比較研究」となっていることを挙げれば足りよう。しかし，何といっても岡田俊裕氏も指摘しているように，この手法は地誌の中でいかんなく発揮されている。「瀬戸内海・エーゲ海・エリー湖－その沿岸の比較地誌的考察―」（船越謙策教授退官記念事業会『地理科学の諸問題』；昭和47年）が有名であるが，圧巻は「地誌・ベトナム諸国」（『新世界地理４　東南アジア』朝倉書店，昭和34年）の比較歴史地誌である。その紹介は岡田氏にゆずるが，ただこれが執筆された当時私は助手であったので，後にも先にもなく，痛々しいまでの目ぼっこ（目の腫れ物）を出してまで執筆されたお姿を見たことがないことをつけ加えたい。比較歴史地誌という新しい手法が問題とされた以上に全精力を投入し，決断を要することであったことが拝察される。

先生は温故知新を地で行く先生であったとも云えるのではないか。すべての発想のはじめには歴史があった。現在を説明するものとしての歴史，つまり現在の地域を解くものと

しての歴史があった。そのどこかには現在を解き，未来を展望する方法として生態学的手法をとらないことと共に，わかりやすく納得させる方法として歴史がすぐれていることを学史から得たように思われる。20周年の会長講演の中で，歴史地理学の祖型を，中国の漢代の司馬遷の『史記』と，ヘロドタスの『ヒストリアイ』に求め，それが共に歴史叙述が臨場性に富み，地域の特性について人文地理的記載を行って，名称は史書であるが同祖であるとしている。特に前者についての系譜を史書を読むための書，『読史方輿紀要』がわが国の吉田東伍の『大日本地名辞書』に匹敵すると比定している。ただ，「歴史地理学を史学の俾女たらしめ」ないためには「現在の地理の変遷史的考察として役立ち，本格的な歴史地理学資料」となさなければならないとし，歴史地理学として再構成する読みかえの重要性を指摘している。この点に関して２つのエピソードが今も思い出される。かつて私にとって広島が未知の地であった頃，先生から太田川の中流可部付近の巡検をするからそのガイドブックを書いてみなさいといわれ途方に暮れたことがあったが，その時先生が示されたいわば模範解答が吉田東伍の『大日本地名辞書』をもとにした銀山城の支配領域を柱としたものであった。今１つは３～４年前友人と先生のお宅をお訪ねした雑談の折，友人が「先生歴史地理とはどういう学問ですか」と大変ぶしつけな質問をして困惑したが，その時即座に「歴史時代の地理です」と答えられ恐縮したことがあった。いずれも忘れることができない思い出である。

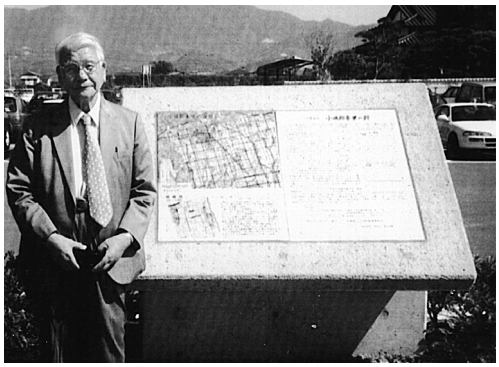
先生は御郷里をこよなく愛された。佐賀県三養基郡上峰町八枚のお生れである。八枚という地名は古代の橋の大きさを表わした七枚という同じ表現があるので，近辺の川か環濠かにかけられた橋に因むものかも知れない。先生から折に触れ郷里のことに話が及べば必ず三養基中学校に学ばれた時，京都帝大を出られたばかりの伏見義夫先生の，教科書によらずプリントと野外見学・実習を学んだことが地理学へ進む要因の１つとなったことを語られた。また，何年であったかは記されていなかったが，御長男の元広島大学工学部，現広島工業大学教授の御好意で母校三養基高校での「私の半生を語る」という講演原稿を見せていただく機会をいただいたが，その中に，「森教育長のお父さんの森卯一先生の歴史がすきであり，中学四年生の頃『支那統一』という雑文を原稿紙で２,30枚になったかと思いますが書いて校友会雑誌にのせていただきました」と書かれ，広島大学を定年退官された時の「米倉二郎先生年譜・業績・思い出」の中にも「生徒としては長文のもので，これを書いた時の楽しさは今も忘れない」とある。これが契機となり，重積する歴史をいかにまとめるかに対する面白さに連なり，それが佐賀高等学校における東洋史の有高巌先生，日本史の篠田周之先生の影響とも相まって，まず歴史という思考体系が形成されていったのではなかろうか。

後になって知ったことではあるが，昭和54年私家版として句集『椰子蔭』をいただいてはじめて昭和初年の物心がついた頃から，ずっと句会などにも参加し和歌・俳句をたしなまれている文人であることを知った。その詩心は母校上峰小学校校歌にも発揮され，昭和28年「米多国造の昔より　文化の流れ脈々と　伝えてここに二千年　わが上峰の人心」と詩いあげ，郷土の若い世代に将来を託した心がうかがわれるが，この心は教え子や郷土史家を動員した上峰村史としても結実するのである。また，ライフワークの１つ条里制研究の端緒をなした筑後川平野の条里遺構の中心地である旧三日月町（現小城市三日月。上峰町に隣接。）に位置するドゥイング三日月の庭には，三日月の出身で先生が郷里の先輩として敬愛されている元京都大学教授の経済

学者で，社会学者でもある高田保馬博士の銅像の前に，先生が進言し，金田章裕京都大学教授，故川崎茂元佐賀大学，金沢大学教授らの協力で平成９年５月10日，旧三日月町教育委員会により「古代肥前国　小城郡条里の跡」の碑が建立された。このことは特に圃場整理のため条里遺構の煙滅が憂慮される時，歴史的にも大きな意義のある記念すべき事柄であった。

また，先生は愛用の米倉文庫を生前からの遺言で，御長男の米倉亜州夫教授から上峰町へそっくり書架ごと御寄贈になられた。町はそのための書庫を建て整備中である。上峰の人心だけでなく，歴史地理学研究の文化の流れとなって脈々と次の世代へと受けつがれ発展することを願ってのことに違いない。

（高松大学）



米倉先生と条里の碑
（高重　進会員提供）

上峰町へ寄贈され整理中の米倉文庫
（高重　進会員提供）